

②私には家族の崩壊現象こそが今日の犯罪を増幅づけているように思える。倫理もしくは道徳の崩壊現象として事件が発生しているように思えるからである。幼児虐待にネグレクト。これでは家族の中で受けるはずの無償の愛を子どもは受けずに育ってしまう。その結果として驚愕するばかりの事件の発生となっていると私は考える。

私は過去の母の愛は悔より深いという家族論は大切と思っている。しかし家族は女性だけが機能的に担えばよいというものであってはならない。男女が共同して参画する家族論の形成が大切と考える。家族は無償の愛を育む場としてあるから。

家族古典論

ヘーゲルの家族論『ヘーゲル自覚論の原理』(久田健吉) 資料③(p14～p17)

- ・ 家族を人倫(倫理)の土台と考えている。
- ・ 婚姻は両性の自然的結合(愛)からはじまるが、この愛を人倫的愛に陶冶させるのが家族だと言う。家族は両性が共同生活と育児を通して、ひたむきな愛を人倫的愛に高めていく場となるから。自分中心の特殊的思考を超えて共に家庭を築き支えるという普遍の心を育てる場となるから。そしてこの人倫的愛の心が市民社会と国家を豊かに発展させる土台となる。共に築き支える心として。

+結婚するとうことは単に自分だけの自立から、家族を築き支える自立への移行を意味する。自立の深化。結婚するとは家族を築き子どもを育て親を看取る人間になるということだから。

+家族の存在意義を説明した(唯一の)書。

+無償の愛、愛の根源は家族の中にある。

上記以外の書物からの貴重な見解

谷川俊太郎氏の見解(1961.9中央公論、父権三との対談)

僕の家には家庭というものはなかった。個人として父母は生き、そして父は暴君として生きてきた。しかし僕は家庭は男と女の世界と思う。だから女の人がいなければ僕は生きていけない。男だけで仕事は達成できるとは思っていない。

福吉勝男氏の見解(『現代の公共哲学とヘーゲル』未来社、2010)

ヘーゲルは家族論で家族の使命として子供への教育を積極的使命と否定的使命の2つにおいて論じている。しかし福吉氏は、なぜが否定的使命にのみ注目して、積極的使命には注目しない。

否定的使命とは子供が市民社会の成員となるための教育。個人が市民社会の息子となっていく以上、この教育なくしては子供は市民社会で生きていけないし、市民社会を支える者にもなれないから、この使命への注目は大切である。そして市民社会の息子を育てた後の老後の家族を配慮するのが市民社会というヘーゲルの見解を明らかにした点は出色。

しかし人倫の要としてヘーゲルが位置づけている積極的使命に目を向けないのは疑問を感じる。ヘーゲルは2つの教育を受けて子供は市民社会の息子(市民)になれると言っているのだから。